



第2歴代誌6章

ソロモンの神殿奉獻の祈り

ソロモンの神殿奉獻の祈り 2歴6:14-42 2017.11.10

17-17 主の家 子の王座 1歴24-25 ソロモンの王座	18-21 家 天正 名 新設日新	14-17 王 王座 座 天正		
	28-31 心 天正 485	26-27 名 天正 (1歴24-25)	24-25 心 天正 619	22-23 心 天正 619
	36-39 捕囚 485		34-35 心 天正	32-33 心 天正 619, 485
2歴7:12-19 (王)	42 王 天正 油法 殿 天正	40-41 家 天正 天正 油法 殿 天正 (天正)		
17-22 19-16 王 天正 家 天正 天正 油法 殿 天正 天正				

地の平和、家
平和、王

ソロモンが神殿を捧げた時の祈りの分析をしました。

「歴史書の中の祈りの連鎖、ソロモンの祈りとダニエルの祈りを中心に」という菅野審也さんの論文があります。

<https://kurabeteyomu.com/analysis/prayersinthehistory.html#essay.prayersinthehistory.pdf>

ここの中にソロモンの祈りの背景、それと求めていること、その祈りの分析、それと、その祈りが、その建て上げた神殿が破壊されている、囚われているということを嘆くダニエルの祈り、70年後にもう一度戻ってきますという約束のもとに祈っている祈り、神様の家に向かって捧げる祈りというこの大きな2つを比較しています。

この比較しているところを見ると、いろいろな強調しているところがはっきりとわかります。その祈りによって、神様の家、神様の住まい、祈ることとはどういうことなのかかわかるということで、この分析をしています。

この論文だと、祈りの課題が7つあるのですけれど、7つの課題の中の分析は、この時はしていないようです。 「しもべの祈りと願いに御顔を向けてください」「しもべの願いを聞いてください」ということに囲まれて「7つの罪の赦し」というように書いてありますけれども、この7つはどうだったのだろうかということを今回分析してみました。

6章の祈りの出だし、祈ることと、祈りの課題(このことについて答えてくださいということ)と、また最後に神様を呼ぶということで囲まれているわけですが、6章の出だしと終わりのところ、出だしのところが14節から21節、ここが2つに分けられるでしょう。最後の40節から42節、ここも2つに分けられるでしょう、短いですが…。

間に7つあります。最初の「隣人に対して罪を犯し、誓いをするようになった時に」「剣」「ききん」「災いの時に」「異邦人の中で光となる」「戦いに行く時に」「捕虜になっている時に」という7つの罪、7度罪を赦してくださいという時の7だったりします。

1,2,3,4,…7つの悔い改めというのを見ると、2つに分けられるかなと思います。「隣人、剣、ききん、心を知る」、というふうなまとめてあります。災いにあっている時に心の悩みを知る、心を知っている、すべての人の心を知っているという「心を知る」それと、「異邦人」「戦い」「捕虜になつて(捕囚)」。この呪いの箇所は申命記28章に出てきます。その出てくる箇所は、ここに書いてあります。ここ(2歴代誌6:26)が申命記28、ここ(6:28)も申命記28、ここ(6:32)も申命記28、(6:34)申命記28、「囚われている時に」は、申命記30章に飛んでいます。

最初の隣人に対してのところ、ここが個人的な話のような感じがして、どういうことなのかなあと？が付いてしまうような箇所ですね。これは、何だろうというところから、この分析が始まっていくかと思います。

隣人の話、誓い話があります。この誓い話、隣人に対しての偽りの誓いという、レビ記の19章にあります。「偽りの誓いをするな、虐げるな、正しく裁きなさい、中傷するな」というところ。これは、隣人を愛しなさいというように要約されることです。これは、この命令を守るならば、…反対ですね…守らないと、主の名を汚すことになりまうというのが、隣人に対して、愛を行わない、義しきを行わない、憐れみを行わないということは、「神様の名を汚すことになりまう」というレビ記19章12節にある通り、レビ記のテーマである「聖なる名を表す」ということで、この出だしのところを連想するのだと思います。天での裁きが地でも行われるようにと言っているような感じです。

裁判の時に。剣とききんと疫病の話は、神殿を建てる場所が、オルナンの打ち場で、モリヤ山で、新しい神殿が建てられる場所、こここそ、神様の家だとダビデが言った事件。その出来事は、人口調査をした出来事です。人口調査をした時の罪を神様に言い表して、赦しを求めた時に、「剣か、ききんか、疫病かどれにしますか」と「いや、神様の御心のままに」ということで、疫病が来るのですけれど、それで、天から火が下って、全焼のいけにえが捧げられましたという事件を見て、ここは、神様の家だと言った場所に今建てようとしているということです。隣人に対してではないのですけども、罪を犯して誓いをする。その誓いを天から聞いて裁きの火が下った。ここに神様がいます。裁きの座はここにあるということで、神様の家をここに建てたいということ、ダビデがわかったわけです。

その出来事、それで、ここに建てるのですけれど、裁きが行われる、天からの裁きが行われる、天での裁きがこの地上で行われるのだというその場所、それは、主の名が付けられている場所なのだという主が選んだ場所はここですという出来事があって、この6:22～:23のところがありますから、「隣人を愛しなさい」ということこそ、神様の聖なる名を表すことなのだということだと思われまう。

ここに対して、剣、きぎん、疫病という災いが来るけれど、神様はそれを癒すということ。きぎんは、地が産みださない、不妊のみたいな感じ。疫病は、人が消える、捨てられる、死ぬ。剣は、地を取られて財産が奪われるという平和の地に対しての害。シャロームの反対の典型みたいな感じ。です。

それに対して、心を知っている、心を知っていると書いていますので、心を尽くし、思いを尽くしというのが連想される、申命記8章2節。「あなたの神、主が、この40年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった」心の内にあるものをするためだった。父が子を訓練するように。それで、心を知っておられる、心を知っておられると、その道にということを書いてあります。これは、申命記側の「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして歩んでいるかどうか」を神様は見ているということを書かれているように、申命記側とレビ記の命令ですね。

これに囲まれて、剣ときぎん。特に、命に対しての攻撃、それと、支配に対しての攻撃というものが言われていますので、与えられた地、先祖に与えられた地、相続として賜った地。この地が平和である、神様の民が平和に住むということを書いてあるというほう。それに対して異邦人が世の光を見るということ(6:32-33)ですね。シェバの女王が来ます。こちらは(6:34-35)、戦いに出て、(勝ってるも負けてるもはないですね)戦いに行くときというふうに書いてあります。これは(6:36-39)負けて捕らえられている時にと。放蕩息子のような感じ。捕らえられていたところで、父の前に戻ってくるならばということ。です。

こちら(6:32-33異邦人,34-35戦い,36-39捕囚)は、王の王である。王座に着くイスラエルの王は、天のこども。ですから、王の王、平和の王である。こちら(6:14-17王,18-21家)は、王座が堅くされて、主の御名の付けられた家が建てられるというダビデに与えられた約束、それをソロモンが成就する大きな2つの課題。この4つ(6:22-23隣人,24-25剣,26-27きぎん,28-31心を知る)が地の平和、家について、こちら(6:32-33異邦人,34-35戦い,36-39捕囚)は、平和の王、王座についてという2つに分けられるのではないかなと(思います)。

それで、ここが申命記とレビ記の神を愛し(6:28-31心を知る)、隣人を愛する(22-23隣人)ということをするなら、命が守られ(26-27きぎん)、悪から守られる(24-25剣)という民側と、その与えられた支配者は全地の王になる。どんなところに行っても絶対に連れ帰ってくれる王になるという、王の王であるということが言われて、最後に「どうぞ聞いてください。油注がれた者の顔を退けないでください。」と言って、また、神様が家に住み、ダビデの王座が建てられるということだと思えます。

もともと、第1歴代誌の17章で、ダビデがナタンに言われるところ。主の家を建てます。子の王座が堅くされます。約束のとおり主の名の家が建てられる。それが建てられましたので、ソロモンが祈ります。

そうすると、7章で主が答えてくださるところも2つに分けられます。こちらは珍しいと思ったのですが、「天から聞いてその罪を赦し、その地をいやす。(7:12-16)」相続地をいやすということと、王座が堅く建てられる(7:12-22)という2つのことが、答えの中にも入っています。祈りのでだしのところの王座、「ダビデへの恵みを…(6:14)」「ダビデへの恵みを覚えてください(6:42)」というところで始まりますけれども、こちら(6:16)は、しもべダビデの子が、イスラエルの王座につきまします。こちら(6:41)は「御力の箱」です。御力の箱は、神様の足台。天が座で、地が足台。これはマタイ5章のここ

ろにありあます。安息の場所に入って、聖なるものなのです。祭司と聖。そして、安息です。こちら(6:42)は、「油そそがれた者の顔を退けないでください。」に対して、神様の顔をこちらに向けてください(6:19)という顔の話になっています。顧みては、御顔をこちらに向けてという言い方になっています。全体は主の名が付けられている家と、主の子であるダビデの子が王となるということをお話しています。

主の祈りと一緒に考えるべきものだろうということです。それは、また別に詳しく見た方が良いでしょうけれども、主の名の付けられている家、それと神様の国が来るようにと言っているわけです。そして御心が行われるように。「私の目と私の心は、そこにある(7:16)。」主の名の家に神様の心があります。そして、私たちの心を知っていますということですから、御国とその義をここであらわされている。

全体として、主の名の家が場所のテーマです。その中で、パンが与えられる(6:26-27)、敵から守られる(24-25)、そして、罪が赦される(22-23)ということですので、全体として主の祈りのすべてが、ここにもまとまっているということだと思います。

ですから、主の祈りが入っているマタイの「山上の説教」を思い出すようなところがあります。隣人に対して、罪を犯して誓いをしなくてははいけない。祭壇の前に来て誓うならば(22-23)なのですが、マタイの山上の説教の5章21節、殺してはならないという話なのですが、裁きを受けなければいけないのですよね。裁きを受ける前に、祭壇の前に置いたまま仲直りしてくださいね(マタイ5:24)と言われてたり「誓ったことを主に果たせ。天をさして誓うな、そこは神の御座。地をさして誓うな、そこは神の足台。エルサレムをさして誓うな、そこは、偉大な王の都(マタイ5:33-35)だ」と言って、軽々しく誓いをしている人たちを裁きますよね。そんなことも思い出します。それと、「もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいませ。(マタイ6:14)」というこの主の祈りについて、いちばん強調されているのは「隣人の罪を赦す」ということですから、それがこの神殿を捧げたときの祈りの課題の出だしになっているのも妥当なところなのだろうと思います。

山上の説教自体が隠れたところで見られる天の父がという「天の父が、天の父が」と言っている説教です。ここも「天の父が、天の父が、天で聞いて、天で聞いて…」ということもずっと言われていますので、山上の説教を思い出すということが、ここにもあるかと思えます。

18章22節に「兄弟の罪を何度赦したらよいですか」と言っているときに「7度ですか」というときに「7の70倍」と言っているので、課題が7つあるのも妥当かなと思います。

「祝福とのろい」の言い方で、申命記ではなくて、レビ記26章のところには「祝福とのろい」があるのですが、ここには7倍、7倍、7倍というふうに、7倍の話がたくさん出てきます。ききん、剣、疫病は、主の怒りによるのだと。国の恥なのです。国の栄光と国の恥というような、イスラエルの栄光とイスラエルの恥が、その名が付けられていますから、神様の栄光と神様の恥というのと連動しているということも言えるのだろうと思います。

罪の赦し、とりなしに関しては、アブラハムの(創世記)18章、民の罪を赦してくださいという金の子牛の話(出エジプト記32章)、カナンに入ろうとして偵察したときに主を侮る時に赦してください…でも40年になりますというような話(民数記14章)、マナだけだと言っている時にもとりなしがあります(民数記11)。罪を赦してくださいと言ってい

る時に、個人的な話をしているかのようですけれど、モーセは民全体のとりなしをしている、アブラハムもとりなしをしているところも思い出すところだかと思えます。

誓いをしているところは、アビメレク、アブラハム、ベエルシェバという話もありました。それと、地の王たち、約束の地は御国です。神様に愛されている子ダニエルは、この祈りと一緒に見なくてははいけません。

申命記30章(15)で約束の地に入ると、いのちと幸い、死と災いをさばく、生きて数がふえる、生めよ、増えよ、地を満たせというこの祝福が、生めない、増えない、地を満たせない、地を従えていないというところにも言われているでしょうねということでした。それと、聞くこと、聞くこと、天から聞いてください、天から聞いてくださいと言っていますけれど、自分たちが聞くということは、いけにえに勝るものだという事は、サムエル記の中で言われていますよね。サウルが捨てられたのは、聞かなかったということでした。

神様の答えの中にそんな言い方があったのかなと思ってみたのは、「私はあなたの祈りを聞き、この所を私のために選んで、犠牲をささげる家とした(7:12)」犠牲の家という言い方があったのだということでしたけれども、この7章の前の箇所は、いけにえをささげている箇所ですよ。それで、神様が答えてくださった。神様を呼ぶ、全焼のいけにえをささげるということは、神様に正式に祈って聞いてくださいと頼んでいる。それで、神様が答えてくださったということです。地をいやしたということです。

王位を堅く立てることに対して王様が命令を守らないということなのですが、守らないとはどういうことになるかということ、守らないと言っている意味は、神様のことをばを捨てて他の神々に従うということが、命令を守らないということです。それだったらば、私はあなたを捨てますと言われています。王座を堅くすることに対して、捨てる、捨てられるという呪いです。その呪いの時代が、やっと終わりましたというのが神殿が捧げられているということです。

それは、捨てられていたものがもう一度確かなものになりました。確かなものになりましたけれど、元通りに戻ったのではなくて、もっと素晴らしいものになりました。前は、木での幕屋でしたけれど、今度は石の上に建てられているという家に変わります。ヨシュアが連れ出して、シロにモーセの天幕と契約の箱を置いていました。しかし、神様を捨てる者たちががどどんと墮落して、モーセの幕屋からペリシテ人に契約の箱が奪われて、キルヤテエアリムに20年いた。それを見つけて、ダビデが持ってこようとする。でも、ウザがいて、オベデエドムに3ヶ月いました。シオンに天幕、そのための幕屋を作ってダビデの町に契約の箱を持ってきました。一方、シロは、(サムエルの時にエリたちが仕えていたところ)墮落したので捨てられました。その代わりに、シロが捨てられた(ペリシテ人のところには神様がいなくなってしまう)ので、ダビデは、その幕屋をエルサレムに近いギブオンという場所に持ってきた。それは、アロンの相続地。そこに持ってきて幕屋はここにあります。契約の箱と幕屋がバラバラになっています。それで、いよいよ場所が決まりましたといった時に、このギブオンで最初祭壇を作ったものを持って行って、ソロモンたちは捧げものをする。それで、そのあとにこの家、神殿を建てる。これが出来上がった時にこの祈りをささげて契約の箱を持ってくるという順番になっていますよね。契約の箱を…(2歴代誌5:3-)ダビデの町から主の契約を運び上げて神殿の中に運びいれました。それで、歌を歌いました。そして、この祈りを祈っているということです。神様がペリシテに連れられていってしまった。エジプトから連れ出されたのは、民ではなくて神様でしたみたいな感じですが、新しい本物の家に戻ってきたということで、大宴会、仮庵の祭りの大成就があります。

詩篇78篇を見ると、先祖たちに与えられた恵みを捨てた、でも、神様は捨てなかったということをお話するストーリーの中にあります。「ヨセフの天幕(これがシロの天幕です)を捨て、エフライム族をお選びにならず、ユダ族を選び、主を愛されたシオンの山を選んだ。それで、ダビデを選んで、イスラエルを牧するようになされた」ということが書いてある通りです。「シロの御住まいを捨てた」ということが言われていますので、そのような歴史を見ながら、神殿に捧げられた祈りというものを見ると、王と家の約束、偉大な国民となる、偉大な名となるというアブラハムの約束の成就がここにあらわれているということだと思います。